わいわい、がやがや、みんなで哲学

場所　〒502-0812　岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

第159号
2021年10月

哲学カフェ de ぎふ
千秋（せんしゅう）まちかど文庫　通信

運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602　yoshida0@sepia.ocn.ne.jp

＜現実はこれをこえる夢への追求においてのみ現実的である＞

（主宰:吉田千秋）

最近、「現実的政策」や、「現実主義」という言説が出回っています。例えば河野太郎氏。自民党総裁選で、「原発の新増設は現時点では現実的でない。安全を確認された原発の再稼働が現実的である」と述べた。脱原発の主張はどこへ？　野党4党の政策合意に加わらず「現実主義を貫く」とする国民民主党玉木代表はその理由を、「他の野党さんと同じ思いだが、現実的な政策アプローチが必要だ」と述べた。要は、自公と同じまな板に乗るということす。

このような「現実的」という表現によって、現実の変革を求めず、結局は現実の容認につなげてゆく「現実主義」の立場・思想は、これまでも繰り返し登場してきました。

「現実」をどうとらえるか、「現実的」とは何か、「現実」と「理想」はどのようなつながりにあるのかなど、この問題をめぐっては様々な検討が必要です。ボクは、10年以上も前に、貧困、若者、平和の問題を取り上げながら「現代社会とリアリティ」と題した原稿を書きました。事情で未発表のままだったが今回あらためて読み直し、いつの時代でも「現実主義」が根深く広範に影響を与えていること、これに対する批判の重要さを感じました。

いま詳細に論じる余裕はないので、少しふれておきたい。

一つは、「現実」をありのままに、それこそリアルにとらえることは難しいことです。戦争体験や被爆体験はじめ様々な惨劇、人権無視の不条理な出来事や苦悩は、当事者以外の人がつかむことは至難です。さらに今日では、現実に起こったこと、起きている事実とは異なる虚偽の情報（フェイクニュース）が身近に大量に出回っています。大切なことは、「現実」を正確に捉え、イメージできる方法、ルート、媒介をしっかり生み出すことでしょう。

＜2021.9名鉄岐阜駅前＞

もう一つは、「現実」というのは、過去から積み上げられてきた様々な自然的・社会的・人間的運動（活動）の結果であるということ。これが意味するのは、「現実」を知るには、過去を知らなければならないことです。むろん、すべてを知ることはできません。だが、特に過去の惨劇・失敗は、「記憶のエチカ（倫理）」として胸に刻みつけておかなくてはならないしょう。

さらに、「現実」は「未来」につながる内容をはぐくんでいます。だから、現実をこえる夢（未来への希望）とのつながりでとらえることで、「現実」はひからびたものでなく、輝いた、ダイナミックな真の「現実」となります。これは個人的な人生の次元においても、社会のありかたにおいても言えることで、実践的、変革的な構え、態度です。ボクの師の一人である古在由重さんは、マルクス、ゴーリキーをもとに、これを「真の現実」「革命的現実主義」と呼びました。

大げさな呼び方と避けずに、このような姿勢で歩みたいものです。

例会休止。便り、意見など

〇＜コロナ禍中の教育のあり方に心配＞

通信158号、ありがとうございました。皆さんの発言、旅行記など、興味深く読ませていただきました。大橋さんの徳山ダムのお話、胸打たれました。

緊急事態宣言、岐阜は未解除です。10月14日までには何とかなるでしょうかねえ。学校の夏休み明け、岐阜市では小学校でもオンライン授業（希望者だけ。あとの子たちは、数を少なくして登校。）をとり入れたそうですが、たまたま家に居合わせた親が見ていたら、先生は画面で一方的に話していて、子どもらの「やだ～」「できませ～ん」などの声が入ったり、勝手にスイッチを切って画面が消えたり、学級崩壊状態のようだったという話を聞きました。

「はい、〇〇の歌を唄って下さい」とか、「粘土で〇〇を作りましょう」と、オンラインで音楽や図工の授業もするのだとか。これでカリキュラムをこなしたことにするのでしょうかねえ。我が家の孫もそうですが、この2～3年を学校の生徒で過ごさなければならない子たちは、ほんとうに可哀想です。

そして今保育所でも学校でもコロナ感染者が出てきています。娘の職場の人のお子さんが感染して来て、親も濃厚接触者で、欠勤になっている人が出て来たと言っています。

東京墨田区では、感染者の自宅待機なしの対策を先手先手で行っていると言います。やれば出来るんです。なんとか早く感染を抑える有効な策を日本中でとってほしいと思います。　（あ）

〇＜水俣のことを思う＞

静岡県に生まれ育った私にとって水俣は遠い所。

そして、そこで起こった事も関係なかったにも関わらず、なぜ関心を持ってしまったのか。最大の要因は石牟礼道子さんの本に惹かれたからだ。

自分の意思とは関係なくこの世に送り出され、生きなければならないのは何故か？　そして、それを理解しないまま新しい命を送り出す繰り返し。真に不条理というか、何と言うのか。などと考えないで、のんきに生きればよいのだが、これが難しい。私の心の中にあるそんな解決できないもやもやを、石牟礼さんは言葉にしてくれているような気がした。彼女が描いた水俣に惹かれ、水俣事件を知ろうと思ったのだ。

水俣事件を知れば知るほど、これは水俣で起こった特別なことでなく、どこでも起こりうることだし、現に原因が違うだけで、同じような現象はあらゆるところで起こっていると思えてならない。人がいる限り、かたちを変えて次々起こる。では人がいなくなればよいのだろうが、それは不可能。私たちの周りで起こる難事は、自然の災害、病気など様々で、それらをなくすことはできない。でも何とか改善し暮らしていく方法を考えられるのは、人しかいない。にもかかわらずさらに悪い方向に仕向けてしまうのも人。他の動物は、それらの難事に屈することしかできない。

チッソという会社は、最初は人の生活を改善する目的で始まったであろうに、人を貶め、傷つけ、お互いの関係を壊した。修復できる場面は多々あったようにも思われるのに。しかし残念ながら、人の歴史は同様なことの繰り返しで、泥沼にはまってしまうことが多い。

常に自分の心を見つめ、何をどうしていくか、丁寧に考え行動しなければならないと思うが、それはあまりに苦しいことだ。ではどうするか、心な中に常に清水が流れているような状態であれ、とも思う。最近、アメリカの映画界が作成した「MINAMATA」はどのように描いているのか、そのうち観てみたいと思っている。　（北川はるか）

○＜良い番組の役割＞

テレビが存在する意味、それは、スポンサーが広告をいかに多くの人に見せるかということに尽きるのだろうと思います。視聴率がよければよいという価値観もそれに伴うものでしょう。

嘲笑する、失敗や取るに足りないことをあげつらうといった言動で笑いを扇動する「芸人」。ワイドショーで、男性の司会者から発言を求められて、「その場の流れ・空気を読んで」「可愛く」「賢くない」発言をする若い女性タレント。コロナ禍の中でコメントを述べる女性教授を「コロナの女王」と言ったり、「最近きれいになりましたね」と声をかけ、恥ずかしそうにする姿を映したり。「面白いのがよい」という価値観に煽られてますます低下する質。私は、全体としてテレビはない方が良いし、無くても新聞・ラジオで事足れると思っています。

良い番組は良い番組なのでしょうが、質（ﾀﾁ）の悪い番組がはびこっている中、非難されるべき番組の一方で、「良い番組もあるのだから」と、悪い番組の延命に役立っていないかと少し心配でもあります。

（森）

○＜「敵基地攻撃能力の保持」の主張に思う＞

自民党総裁選では4候補が意外にいろんな分野で幅広い政策論争を展開している。それがメディア・ジャックとの批判も分かるが、その中で大いに気になることがある。その一つは安全保障の分野で、昨今の中国・朝鮮を意識しての「敵基地攻撃能力を持つ必要」を強調する高市氏とそれに同調的な岸田氏の主張が捨て置けない。これはあまりにも暴論だからだ。そんな人物が日本のトップになったら、恐ろしいことになる。

先ず、それは憲法を公然と無視し、「武力によらない平和を希求する」との大原則を、死文化するとの宣言だ。その人物が「憲法順守」の責務を負う最高権力の座を目指すというわけだから、「立憲主義」の最たるブチ壊し。また「専守防衛」を建て前とした自衛隊も、「先制攻撃」型への組み替えを意味する。戦前への回帰だ。

第二は、現実問題として、「敵基地攻撃」など途方もないことで、仮に対北朝鮮だけを想定してもミサイル発射装置は移動式で、それらを捕捉してたたくなど、不可能というべきだ。8月末をもって撤退したことになっているアフガン駐留米軍ですら、20年間支配下に置いてそれでも反政府軍基地を思うようにはたたけず、挙句の果てに反撃されてしまった現実を解っているのだろうか。対中を想定したら、戦前型の軍事国家になっても到底無理。

第三は、近年アメリカは中国に対して対決路線を強めているが、その中で日本の「敵基地攻撃能力の保持」を言い出すのは「前線の先兵」＝特攻役を買って出るようなものだ。また、現在の日米同盟下で、敵基地攻撃の指令を出すのはどう見てもアメリカで日本ではない。我が国は更なる危険な対米従属に踏み出し、東アジアの緊張緩和と互恵的な協力関係の構築が一層困難になってしまう。

「敵基地攻撃能力の保持」論による安全保障は妄想の産物でしかない。喜ぶのは米日の軍需産業だけ。　（フィリピン・ウオッチャー）

○＜東南アジアの生産、物量の停滞に注目＞

オリンピックのバカ騒ぎが終わったと思ったら、今度は自民党総裁選のバカ騒ぎが始まり、そのため私自身としてはいくら精神を鼓舞しようと努めてもシニカルな思考にならざるを得ない状態が続いています。そのためそうした国内状況にコメントする気力はありません。しかし杞憂であればいいのですが、足元では地殻変動を伴う出来事が起こりつつある気がしますので、それについて述べてみます。

日本ではあまり重大ニュースとして取り上げられていませんが、世界的に東南アジアなどのサプライチェーンの生産量の低下および、物流の停滞などによりコロナによる副作用が顕在化しつつあります。例としては、小麦、大豆などの農産物価格の上昇、セブンイレブンの「からあげ棒」の販売停止、ノーリツのガス給湯器の納入遅延、自動車生産ラインの休止などなどです。

この現象が長期間持続すれば恐慌につながりかねず、総裁選がどうのこうのと言っている場合じゃないと思います。今後は何よりもこの方面の注意が一番重要だと感じました。

（たなか）

○＜アメリカ政府の巨大情報技術（IT大手）企業への対応＞

2021年6月15日アメリカ連邦取引委員会（FTC）の委員長にリナ・カーン氏が就任した。他方、司法次官補にジョナサン・カンター氏を指名した。両氏とも大手企業への規制に関して強硬姿勢をもっている。

カーン氏は　「アマゾンに対して略奪的価格設定と垂直統合に歯止めをかけて市場競争を促すか　市民生活に欠かせない「インフラ企業」とみなし市場独占を認めたうえで規制をかけるか、どちらかの対応が必要である。」と言っている。カンター氏は大手IT企業の市場寡占が中小企業などに不利益をもたらしているとして、反トラスト法をIT大手に厳しく執行するよう司法省やFTCに求めてきた人物である。

「世論に押されて大手企業に規制を強めつつある」との評価と「見せかけのためやっているのだ」との評価がある。私はアメリカの社会の中で巨大企業が巨大利益を上げるまでにいびつに育ってしまった矛盾に手を付けなければならないと自ら動き始めたものとみなしている。リナ・カーン女史の起用がそれを示唆している。任期の間注目して見ていたい。

※反トラスト法:日本の独占禁止法のような法律で3つの法の総称。

※FTC:日本の公正取引委員会のようなもの。

（アダム・スミス）

○＜社会保険料の所得の逆進性問題について＞

現在、自由民主党の総裁選のニュースが新聞やテレビで毎日報道されている。基礎年金の全額税金負担も議論されているが、社会保険料の逆進性について再検証する必要がある。

これまで全く気付がなかったが、定年後の生活設計を立てる過程で、保険料の算定基礎となる標準報酬月額において、厚生年金保険なら65万円、健康保険なら139万円をもって上限が決められていることを恥ずかしながら初めて知った。つまり、それ以上の高所得者は社会保険料が低減していく仕組みになっている。事業主負担もあるから、被保険者以外の負担も発生するが、雇用主としてそれだけの人件費を支払うのであれば当然の社会的負担である。

厚生年金保険料は、老後生活の必要資金に一定の上限を設定しているのであろうが、年金給付でカットすれば良く、あくまで相互扶助の理念に基づく社会保険料であるならば、その理念に従うべきである。ましてや健康保険料については各々が所得に応じて保険料を支払い、受けた医療行為に応じて保険給付を受けるわけであるから上限を設ける必要性は感じられない。社会保険の財源不足が明らかな状況にあり、抜本的な対策が講じられていない中で、この逆進性について初心にかえって再検証してはどうだろうか。

（ryosa）

○＜二代連続の敵前逃亡内閣のあとは＞

最近のテレビのワイドショーなど「自民党総裁選」の報道で我々にも明確に分かったことは、誰が総裁でも「安倍・菅政権の継承内閣」であり、顔は変わっても中味は変わらないことだ。（モリカケサクラの再調査を容認する候補は当選可能性が低く論外。）

ところが有権者の多くは、「総理・総裁が代り、過去の失政や問題点は解消する」と考えがちであるが、それは大問題である。突然の菅内閣消滅は、国民無視であり、安倍・菅両内閣の問題点に蓋をする新内閣に対しては我々の徹底的追及の姿勢が求められる。また安倍・菅政権が長期に「臨時国会召集」を拒み続けたのは憲法53条違反の疑いがある。

尚、自民党憲法改正草案（2012年）53条には「要求があった日から20日以内に臨時国会が召集されなければならない。」とある。自民党石破茂氏は「国会は開会すべきである」と言うが、これらはまったくおかしな話である。我々は新政権に早期の国会審議の実現を求めて行かねばならない。

（井口）

＜京都だより　その6＞　「夏の甲子園」

この夏、甲子園には京都からは京都国際高校が春に続いて出場しました。以前の職場と同じ区内で、車いす講習などで毎年訪問していたので、試合には関心を持ちました。元は民族学校の京都朝鮮中学。試合に際して、校歌の「東海（日本海）」を「東の海」と訳して表示する等苦慮されていました。

この春、夏の活躍により、関心を呼び覚まされたことが幾つかあります。

なぜ「故郷の代表」という見方がされるのか、一様に坊主頭なのか、普段は泣くのは恥ずかしいはずなのに負けて勝って泣くのか。それに周りが心を動かされるのか、大会歌にあるように球児は健康か。

私の通った高校は、高校野球に関してはいわゆる「伝統校」と言われ、80年代は甲子園に出場もしました。野球部員同士、特に上級生に対する内輪の礼儀正しさと挨拶言葉の「ウォッス！」、あれは何なのかと今でも思います。クラス内の陰湿ないじめにも、上手く間接的に加担していました。

強豪校は、全国から生徒が入部し、地元といっても曖昧なものです。「故郷の代表」という呼称に、自らの生涯の一部を重ねることの心の拠り所のようなものを感じるのでしょうか。

五輪でも、憲章で個人参加とされているのに、ことさら日の丸を背負ってという強調があります。この度の五輪では、テニスの錦織選手、陸上の新谷選手を除き、開催強行に対して、またコロナ禍による発病者・

「京都国際高校の校歌紹介画面」

医療関係者への気遣い等の言葉はありませんでした。

試合での活躍とは裏腹の沈黙や、「私には何も変えることはできない」と無力を訴える発言は、市民として、主権者としてどうなのかとも思いました。

企業からの1億円の報奨金、東京五輪誘致の発言、新聞の全面広告（「その挑戦が、未来を変える」（東京海上日動））に登場する姿を見ると、スポンサーに、世間に縛られ、意に沿って動く姿を見たように思います。

高校球児達が、上からの指示や仲間内のルール等に従順な姿勢を育てられ、この度の五輪で見られたような選手の不気味な沈黙の控え選手にならないように願います。　（hiro）

＜世界一周貧乏旅　その24＞　「北のアイルランド」

国の名前に『北』が付くかどうかで全く違う国のことを指すのは日本人にとって馴染み深いことですが、　遠く離れたアイルランドでも同じことが言えます。

イギリスの隣、アイルランド島には二つの国が存在しており、アイルランドと北アイルランドに分かれています。簡単に言うと、アイルランドはEUに属し独立した一つの国で、北アイルランドはイギリスという連合国の一部であり、EUとの関わり方はイギリスの方針に従っています。

1920年に誕生したこの国は、アイルランドと地続きの島国でありながらそれぞれが別の国であり、片方はEU、片方はイギリス、しかし双方に国境はなく、アイ

ルランドからバスに乗りっぱなしで降りることなく北アイルランドに到着することができます。僕自身もアイルランドから長距離バスで北上し、今回載せた写真

のジャイアンツ・コーズウェイという北アイルランドの世界遺産を観に行きました。

僕は2週間のアイルランド島滞在のうち、数日間北アイルランドに滞在したのですが、景色はアイルランドとさほど変わらないものの、通過がユーロからイギリスポンドへ変わったり、大らかで気さくな性格の人々から、厳格でやや冷たいイギリス人（イングランド人）気質の人々へ変わった印象がありました。北アイルランド人は自分たちを「アイリッシュ（アイルランド人）」と名乗るか「ブリティッシュ（イギリス人）」と名乗るか分かれるそうで、それはつまり、国内ではイギリスからの独立派とイギリスとの連合維持派に二極化している表れでもあります。

19世紀のイギリスへの併合からその二つの派閥同士の争いは絶えず、抗争と武力弾圧、テロといった情勢の不安定さが続き、分断と対立は深まるばかりでした。1990年代にやっと和平の可能性が見え、テロなどの脅威も収まったおかげで外国企業からの投資も受けるようになり、経済成長を遂げ今に至ります。

だが、イギリスのEU脱退に伴い再び南部との国境問題が持ち上がり、EUに属していたおかげで存在しないようなものだったアイルランドとの国境は、「EUじゃないなら壁も通関も作らなきゃいけないのでは…」と、せっかく収まっていた火種をまた大きくするような事態となってしまっています。

これを書いている9月下旬の今まさに、EU、イギリス、北アイルランドで揉めに揉めており、9月末にはEU離脱の際に新たに導入された通商ルールの期限を迎えるため、この通信が読まれる頃には北アイルランドの状況は大きく変わっているかもしれません。イギリスとEU、そして北アイルランドにこれ以上混乱が起きないことを祈るばかりです。　（カモノハシタニ）

金平茂紀ほか　『白金猿Ⅱ』（かもがわ出版　2021・6）

白井聡、猿田佐世という気鋭の若手論者二人と「抗う」ジャーナリスト＝金平茂紀氏による鼎談集の第二弾である本書には、「コロナ禍で可視化されたこの国の深層」というサブタイトルがついている。前作では安倍長期政権の対抗軸はどこにあるかがテーマになっていたが、それから3年、新型コロナウイルスによるパンデミックという新たな事態に直面して右往左往する政府の姿を観ても、国民はただ呆れ、かつ、あきらめと我慢のうちに嵐の通り過ぎるのを待っているだけ。怒りが怒りとなって表れてこないのはなぜなのか。本書によれば、今日の若者たちには社会全体に対する関心が薄いもしくは無く、無社会観とでも形容すべき深い疎外感がやどっているという。これは若者だけの傾向とは言えないようにも思えるが…。

3人の論者が指摘するのは、日本はもはや先進国ではないことを自覚すべきであるということである。日本は主権国家でもなく、近代国家でさえないのかもしれない。そうしたとらえ方はしばしば失望感、挫折感に直結しがちであるが、あとがきではこう記されている。「救世主は存在しない。われわれがわれわれ自身の救世主になるほかない、という気づきだけが今日の危機を突破する扉を開くだろう。」と。

まことにその通りである。私たちはこの現実としっかり向きあうところから始めよう。

＊金平茂紀さんは、11月3日の[2021ぎふ平和のつどい]の記念講演者です。　（Kirai Abe）

色川大吉著「明治の文化」（岩波現代文庫、2007年再版）

本来は現在手に入る本を紹介すべきだが、先日訃報を聞いた色川大吉さんの本書を紹介したい。色川さんは日本近代史が専門の歴史学者だが、水俣病問題をはじめ多方面で精力的に発言・行動してきた。本書は1970年（岩波・日本歴史叢書）初版だから色川さん40代半ば、最も精力

的に研究を進めていた時期の書き下ろしだ。色川さんの著作はあまたあるが、学生の時に初めて読み本書の迫力に圧倒されたことを覚えている。今回読み直して再びその記憶が蘇り、手に入りにくい本だがぜひ皆さんにも読んでいただきたい一冊だ。

「明治の文化」という書名からは、明治期の思想とか芸術とかを考察する内容を想像してしまう（私も読む前はそうだった）。しかし本書を貫く視点は、19世紀後半に開国、欧米帝国主義国による植民地化の危機もあった日本がなぜ独立を保ち得たのか、やがて自身も帝国主義国として植民地獲得に乗り出す日本には他の道はなかったのか、さらに今も日本社会にのしかかる近代天皇制とは何なのかの3点だ。ただこれだけなら、当時の著名な「指導者」・「文化人」の発言や著作をなぞるだけでも本が書けそうだが、色川さんはできる限り民衆や民衆に近い人々の思考や行動から描き出そうとしている。

とくに圧巻なのは自由民権運動の中から、帝国主義国ではない日本、近代天皇制に覆われない日本への可能性を描き出した Ⅲ～Ⅴ章だ。奥多摩の山村で荒れ果てた土蔵から、色川さんが発見した有名な「五日市憲法」とその関連文書を手掛かりに、民権運動が「名もない」村人の中にしっかりと根付いていたことを生き生きと描いている。秩父事件にも色川さんは同じ風景を見ている。

最後になったが、色川さんは本書の後半では近代天皇制を考察している。詳しく紹介する紙数はないが、色川天皇論も機会があればぜひご一読を。50年前に書かれたが、本書は私にとって今でも学ぶところが多い。　（井川敏郎）

例会会場案内

例会への事前申し込みは不要です

2021年後半 哲学カフェ、第26期の予定

例会は19:00～21:00です。

会場は、 ふれあいスペースです。コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。

第158回例会 8月12日（木）	**休止します** お盆とコロナ感染対策のため **緊急事態宣言中につき**
第159回例会 9月9日（木）	**「東京オリンピック強行、どうだったのか？」** ＊加速するコロナ感染増と医療危機の中での強行。さまざまな問題が露呈した。 ＊オリンピックのもう開催しないなど、あらためて抜本的に見直す必要があるようだ。 中止しました
第160回例会 10月14日（木）	**「テレビ番組とどう向き合うのか？」** ＊テレビの衰退が言われているいま、本当に楽しく、有意義な番組はあるのか。 ＊報道番組、ドラマ、ドキュメンタリー、バラエティ番組等、推奨したいものは？
第161回例会 11月11日（木）	**「総選挙はどう仕組まれ、その結果は？」** ＊安倍政権を引き継いだ菅政権は、無策・失策続きで、総選挙は勝算が見えない。 ＊とうとう議員満了まで引き延ばし。五輪強行、ワクチン頼みの結果はどうか？
第162回例会 12月9日（木）	未定。現時点では、日米・日中関係等を検討中。

哲学カフェの運営資金の協力 も、よろしくお願いします。

口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !!

http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェdeぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願います。友人・知人に拡散いただければ幸いです。

わいわいがやがや アラカルト

★楽観は禁物であるが、コロナパンデミックが終息してくれる気配を感じる昨今である。しかし、気がかりなのは、自民党総裁選後の衆議院選挙である。まさかの自民大勝、ついに「憲法改悪」という最悪の事態が到来するかもしれない。

★国民の民意を無視して憲法を変えようとする政府・自民党の動きに最大限の警戒をしなければならない。私自身も憲法問題の根底にある本質的なモノ、「憲法改悪圧力」の震源地を知りたいという思いから、関連するいくつかの本を読んでみた。

★まず秋の夜長にふさわしい読書として、『井上ひさしの憲法指南』（岩波現代文庫）は、わりやすく解説してあり、多くのことを学ぶことができた。その中で、小田実の「絶対平和主義」、「いかなる戦争も認めない」、「正義の戦争はありえない」という主張が引用され、強く心に残った。

★次に、友人の勧めで、『知ってはいけない隠された日本支配の構造』（矢部宏治著、講談社現代新書）を読んだ。これを読むと、日本を戦争できる国にしたいという根源的な圧力は、米国にあり、日米安保条約にあることがわかる。

★敗戦後、今日まで70余年を経ているが、敗戦国日本は戦勝国の米国に対しては独立国家扱いではなく、日本の国土はすべて米軍の治外法権下にあることを思い知らされた。

＊さらに、原彬久著の『戦後日本を問い直す:日米非対称のダイナミズム』（ちくま新書、2020）へと読み進んで、いろいろ考えさせられた。

★米日の支配・従属関係の原型は、太平洋戦争の勝者と敗者との上下・優劣関係の中で形成され、米国主導の「日米非対称ダイナミズム」を基軸とした論考と分析は緻密であり興味深い。ただし、「（日本は）相応の軍事的負担を担いつつ民主主義を確固たるものにするため、日本国民が何をなすべきかを問いかけている視点には危うさを感じる。

（島田幹夫）